

# シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2006年12月 第6号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email [omiya@church.jp](mailto:omiya@church.jp)

## ぼくにもその愛をください

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

11月19日の主日、私たちの教会では収穫・成長感謝礼拝を行いました。礼拝中で、「ぼくにもその愛をください」(作絵 宮西達也、ポプラ社)を子どもへのメッセージとしてお読みしました。この絵本は、わが家で親しんで読んでいる最強恐竜ティラノサウルスシリーズの最新版です。弱い恐竜たちを苛め、獲物として生きるティラノサウルスですが、獲物にされる側の弱い恐竜を通して変えられ、最後には自分の獲物にしようとしていたものを助け、代わりに自分のいのちを捨てていく、という絵本です。

教会では今待降節を迎え、一本の蝋燭が待降節第一主日(12月3日)礼拝の中で灯されました。このように、一本、そしてもう一本の蝋燭が灯されることを楽しみにする中でわたしたちは幼子イエスさまのお生まれを待ち望んでいきます。小さき方、低き方としてお生まれになり、わたしたちのために十字架での死を成し遂げてくださる方のお生まれを待ち望む私たちの心が、小さき方、低き方を受け入れるに相應しいものでありたいと思います。

「ぼくにもその愛をください」に描かれているティラノサウルスは、本当は強いもので、暴れん坊君と呼ばれていましたが、小さきものに出会い、その小さきものを通して伝えられたやさしさや温もりのある暖かい心に触れる中で変えられてゆくのでした。この世の価値観は力あるもの、強いものが勝つと教えられますが、しかし、本当の強さは力にあるのではない。やさしさや温もりのある心をもって関わることのできる「愛」こそが本当の強さなんだと、この絵本は伝えています。

待降節を過ごしている今、わたしはティラノサウルスの姿に自分を重ねる中で、本当の強さを身につけるために自分から弱く、小さくしてしまっている対象を今一度考えてみたいと思いました。幼子をわたしの中に迎えるために。



## 聖書のみことば

### 列王記上 17章8～16節

また主の言葉がエリヤに臨んだ。「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。14 なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで

壺の粉は尽きることなく 瓶の油はなくならない。」

やもめは行って、エリヤの言葉とおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

### ヘブライ人への手紙 9:24～28

なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所ではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。また、キリストがそうなさったのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずで、ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。また、人間にはただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

### マルコによる福音書 12:41～44

イエスは賚銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賚銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

# 説 教

## 『お預かりしたものですから』

1979年はマザーテレサにノーベル賞が受賞された年です。そして、同じ年にも一つの喜ばしいニュースがありました。地球上から天然痘(死に至る重い感染症)を撲滅させる薬が開発されたというニュースでした。

マザーテレサはノーベル賞を受賞した席上での挨拶の際に、天然痘が地球上からなくなったニュースを取り上げながら、次のように挨拶をしました。「天然痘は亡くなりましたが、しかし、世界最悪の病がまだ残っています。それは、自分が生きていても、生きていなくも同じだ、生きていない方がましではないかと考える精神的孤独、精神的貧困という病です。そしてその病は、どれほどたくさんのお金を投入して研究しても、または世界の優秀な頭脳を集めて研究したとしても、特効薬を開発することが出来ない病なのです。」という内容の挨拶をしていました。

精神的な孤独、精神的な貧困、つまり、精神的な貧しさというのは、お金や豊かさや高度の記述では解決することが出来ない病、深刻な病であるというのです。マザーテレサは日本を訪問されたときにも同じことを述べられました。

「この国は経済的にはとても豊かな国ですが、しかし、精神的にはとても貧し

い国です。」と。

精神的な貧しさ、これは、ですから、経済的に豊かになればなるほど訪れるお客様のような病ではないかと、わたしは思うのです。豊かさの中で、物理的には満たされて生きているけれど、しかし、生きていても、生きていなくも同じだ、生きていない方がましではないかと考えてしまう現実が豊かさの中にこそ広げられているということ。

この頃、日本全国の、特に中学校で学内の苛めに耐えられずいのちを断つ子どもたちが後を断たない状態続いています。これこそ精神的な貧しさがもたらせてくれた一つの実態ではないでしょうか。つまり、苛める側にいる子が抱えている精神的な貧しさに、弱い立場におかれている子が犠牲になっていく…精神的な孤独感から抜け出るために弱い仲間を苛めることを通して自分の存在感をアピールしていく…わたしたち大人は今のこの現実とどのように向かい合うべきでしょうか。

強がって見せること、トップになること、格好よく見せることが本当の生きる道ではないということを、私たち大人はどのようにして知らせることが出来るでしょうか。周りが、家庭が、教育の現場にいる教

育者たちが、苛めないように、苛めは悪いことだと導くだけではなく、苛める側にいる子どもたちに、もう苛めなんかしなくてもいいんだよ、あなたは独りぼっちではない、あなたにはこれだけ一緒に生きている仲間がいる、家族がいる、あなたはそのままのあなたでいいんだよ、相手をつぶしてまで強くならなくてもあなたのままで素敵なんだ、そのままのあなたでいいというメッセージをもって関わっていく大人は、もうこの社会にはだれもいなくなったかのようです。

精神的孤独からくる心の貧しさ、これは、世界の人々のいのちを脅かしていた天然痘よりも恐ろしい病であるということ。マザーテレサは、「この精神的貧困を癒す唯一の薬は、やさしい、温もりのある人の心しかありません。」と、ノーベル賞受賞の席上の挨拶の最後に語るのです。

やさしい、温もりのある人の心。これは、いつでも、どこでも、だれでも持っていて、いつでも、どこでも、だれでも与えられることのできそうな薬のようで、しかし、わたしたち人間は、どれだけ心の貧しいものでしょうか。それを、どうぞ！と与えることが難しいのです。乏しいのです。物理的な豊かさの中にいるから目に見えない貧しさにはなお気づきたくなくなる…自分のことに関して他者のことに関して、表に現われない貧しさには手を触れたくなくなる…ますます病が深くなっていくばかりです。

今日の福音書は、一人の貧しい女性が賽銭箱に自分の生活費全部を捧げている姿が描かれています。

賽銭箱とは、神殿(教会)を維持するための献金(建築献金)をするところでした。一箇所にいくつかの箱が置かれて、人たちはそこへ並んで献金をします。ところが、その箱が置かれている向い側には、献金箱と献金する人を見張る場所が設けられていました。なぜ見張りの場所が設けられていたのか、確かなことはわかりませんが、きっと献金したものが盗まれないようにという目的だと思います。そうではないほかの目的があったのかもしれませんが、ともかく、一人の貧しい女性が、もうそれを捧げてしまえば生活費が全部なくなるというのに、しかし、自分にあるものすべて、レプトン同化二枚を賽銭箱に入れているのです。

当時の人々の間では、神に対する献げものが大きければ大きいほど神に喜ばれると考えられていました。今でもこのような考え方がないとは言えません。しかし、このことが、今日、イエスさまが見ておられるところで、当たり前のように考えられていたことが逆方向へと結びつけられ、導かれているのです。つまり、献げ物の大小が、献げる人の信仰や敬虔さの大小を現していることにはならないということが語られているのです。

つまり、金額そのものとしては、この貧しい女性の献金はまったく役に立たない

ほどの額でしかありませんでした。しかし、イエスさまは、それを「最大」の献げ物と褒めておられるのです。彼女にとって捧げた物は、彼女の生活費全部だった。他の人にとってはほとんど意味を持たないような額でしかなかったけれど、また、神殿(教会)を維持するためにもほとんど意味を持たない額でしかないけれど、しかし、それは彼女にとって「生活費全部」であって、彼女はそれをささげたのだということ。

今あるものをすべて、生活費を全部捧げ尽すことは、自分自身を献げることにはなりません。それは、捧げてしまえばその後の自分自身をありのまま神に委ね、明け渡して生きるしかないことを意味することです。このことは、今のわたしたちの生活状態からはあまり理解しにくい話なのかもしれません。捧げてしまえば明日食べるものを買うお金がなくなる…むしろ生き方下手な女だと言われるかもしれません。自分の将来さえ計画できないからです。

しかし、自分にあるものをすべて捧げて自分を明け渡し、神さまに委ねて生きるということは、今自分にあるもの、どのようなものでも、自分自身のいのちさえも、自分のものではない。神さまから預けられているものだから、だから預けてくださった方にいつでもお返しできるようなかわりをもって生きる姿勢。預けられていると思えば、執着して手放したくなくなると頑張らなくてもいい。もっと、もっとためようと欲張らなくてもいい。自分だけのもの

のにしようと、他者との間に距離を置かなくてもいい。もともとなかったものですから、いつでも持たない自分に帰られる、そんな歩みへと導かれるということ。

もちろん、わたしたちは自分の能力に依じて努力してもうけたものを自分のものではない、と手放さなくてはならないと言う意味ではありません。実際は、自分が努力で得たものであるけれども、それを持っていない周りの人たちと分かち合えるやさしいかわりができるのは、得たものに対する姿勢によって異なると思うからです。日々の労苦の中で得たものであっても、自分が自由に使えるもので、本当にそうしてもいいけれど、与えられている、授けられている、預けられたものという思いですべてのことに向かい合うとき、自分だけではなく、その自分と向かい合っているもう一人も豊かにされていくことに気づかれるのではないのでしょうか。さらに、預けてくださる方の豊かさの中に自分が預けられているという、心の豊かさを味わうのではないのでしょうか。

この福音書の一人の貧しい女性の生き方は、自分のからだ、自分の将来、いのちさえ自分のものではない。神さまのもの、神さまからこの世を生きる間、預けられたものだから、思い切りその方に委ねることが出来たのでしょう。

これは、子どもとの関わりにおいても同じことです。私たち親は、どうしても自

分の考え方に子どもを合わせようとしてしまいます。それは、「自分が産んだ自分のもの」であるという思いが強いからでしょう。しかし、本当は、わたしが産んだけれども、子どもは「わたしのもの」ではなく、子ども自身のものであって、子どもを預けてくださった神さまのものであるということに気づかされる時、親は日々の子どもとのかかわりが変わっていくことでしょう。「わたしの子」という思いの中にいる限り、大人は自分が勝手にできる相手として子どもを見てしまいがちです。そうではなく、神さまがわたしに預けてくださったものですから、神さまからその子にだけ与えられている賜物が育つように、子どもが自らの人生を羽ばたいていけるように、お手伝いする役割が親には与えられているのではないかと思うのです。

大人の世界に合わせて子どもを見る時、ほとんど役に立たないようなちっぽけな存在でしかないかもしれません。しかし、神さまには、大人であっても子どもであっても、ひとりひとりが欠け替えのない、大切な一人です。ですから、子どもに授けられているものを、やさしさと温もりのある関わりをもって伸ばしてあげる役割をすることで、子どもたちの成長を守って生きたいと思うのです。

今日の聖書の貧しい女性の行いは、他者には、特に多くを持っている人たちの目には留まることのない、小さな行いでしかないでしょう。しかし、彼女が信頼をおいて、預けられているものをすべてを捧

げた対象でおられる方は、彼女の献げものが彼女にとってどれだけ大きな意味を持つものかを知っていただきました。人にはわかってもらえなくても、むしろ貧乏人扱いで、豊かな人たちより偏見的な目で見られないちっぽけなものであっても、しかし、神さまは彼女の置かれている今の事情をすべて知ってくださり、責任を持って彼女のこれからの歩みを導いてくださることでしょう。

これだけ捧げれば信仰が厚い人だとか、これだけやっていれば評価をされるだろうとか、これだけ持っていれば安心だろうとか、これだけできれば認められるだろうというようなこの世的な価値判断からむしろ逆方向へと導いておられる方は、その逆方向にある本当の豊かさの中で、わたしたちが自由に、信じる方に向かって積極的に自分を委ねて歩み出す者になることを求めておられます。わたしたちを欠け替えのない一人として受け止め、愛してくださる神さまが私たちの歩みを責任をもって導いてくださるのです。愛されていると信じられる人が他者を愛することもできるのです。その愛をこの方、主なる神さまからいただくのではないのでしょうか。福音書の貧しい字一人の女性のように、あの方に愛されると信じられるその愛に導かれないのです。

ある方がこのようなことを言っていました。

「人生にはただ一つの義務しかない。それは愛することを学ぶことだ。人生には

ただ一つの幸せしかない。それは、愛することを  
知ることだ。」

祈ります。

私たちが持っているものや知っている知識の豊かさによって判断せずに、わたしたちがどれだけ貧しくても、私たちの心が神さまに向けられているかどうかを問われる神さま。今日のこのときを感謝します。日本の子どもたちが、世界の子どもたちが、いつどの時代にあっても神さまの豊かさの中で心が育てられますように導いてください。目に見える強さや格好良さだけがすべてではない、力のあることや健康でいられることだけがすべてではない。本当の強さは、お互いが優しい、ぬくもりのある言葉をかけられる愛に満ちたかわりの中にあることを、再び知らされました。どうか、小さな一人ひとりの子どもたちが、その愛の中で育てられますように。大人一

人ひとりがその愛に倣い、互いに助け合う社会を作り上げていくことができますように。私たちの教会が、そのための助けの手を差し伸べていく教会でありますように。導いてください。

私たちが、今自分のものになっているもの、それは預けられているものであること。それをよく管理し、最後の時には神さまにお返しできるように、自分のもの扱いする用にではなく、神さまのものを扱っているようにすべてを管理していけるように、預かっているものとの関わりも導いてください。

この祈りを、私たちの主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。  
アーメン。



## 水曜夕礼拝聖書のみことば

### 詩編 12 編

【指揮者によって。第八調。賛歌。ダビデの詩。】

主よ、お救いください。主の慈しみに生きる人は絶え、人の子らの中から信仰のある人は消え去りました。人は友に向かって偽りを言い、滑らかな唇、二心をもって話します。主よ、すべて滅ぼしてください。滑らかな唇と威張って語る舌を。彼らは言います。「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない。」主は言われます。「虚げに苦しむ者と呻いている貧しい者のために、今、わたしは立ち上がり、彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」主の仰せは清い。土の炉で七たび練り清めた銀。主よ、あなたはその仰せを守り、この代からとこしえに至るまでわたしたちを見守ってください。主に逆らう者は勝手にふるまいます。人の子らの中に卑しむべきことがもてはやされるこのとき。

## 説 教

### 『七たび練り清めた銀』

今日の詩編 12 編は、ルターが賛美歌を作る際にそのモデルになったところです。教会賛美歌 141 番がそうですが、この賛美歌は宗教改革の歌ですが、私たちの礼拝ではあまり歌われていないものですので、後でその歌詞だけ吟味したいと思います。

また、ルターが賛美歌に用いたこの詩編 12 編は、「真実な人」、「苦しみに出会うれている者」、「貧しい者」とされている人たちが集まる礼拝共同体で歌われていたものです。ですから、教会の中でも豊か

な人たちがあつまる教会ではなく、豊かな人たちから偏見的な目で見られていた人たち、社会的に弱い立場に置かれている人たちが集まる礼拝の中で歌われていた詩編であります。

この 12 編の詩人は、1-2 節において、当時行なわれていた邪悪な状況を、悲しみに浸される中で思い起こしています。しかし、悲しみに浸されているとあって、人間的な思いの中で思い起こしているではありませんし、自分の持っている知識や力の中で何とか取り扱おうとしている

のでもありません。つまり、状況判断がしっかりできる力を持っていても、その自分に委ねるのではなく、神さまの助けを求め、神さまにのみ叫び求めることから祈りは始まっています。

詩人は、民の中の敬虔な信仰をもって、いる真実な人たち、つまり、先ほど申しました裕福で満ち足りている人たちより偏見的な目で見られる社会的に弱い立場に置かれている人たちが、豊かで偽りと傲慢で極致に達している当時の社会現象によって破滅の運命に置かれていることを恐れています。神さまのみことばにのみより頼み、みことばにのみ生きる術を委ねている真実な人たちが、言葉を武器として取り扱っている人たちによって苦しみに出会わされている状況。そのただ中で詩人は祈るのです。

「主よ、お救いください。主の慈しみに生きる人は絶え、人の子らの中から信仰のある人は消え去りました。」と。

この詩人の祈りの中の恐れは、先ほども申したようにただの悲観主義的な人の立場からの恐れではありません。人間的な同情からくるような思いでもありません。社会状況を悲観的に思って自分を悲観視し、自虐するような姿勢からでもありませ

ん。そうではなく、それとは反対に、むしろ人間の集まりの中で、人間的な親しき交わりにのみ信頼を置いていくことによって、そこから大きな罪の現実が現れていることを告発しているのです。

つまり、人々の集まりの中で、人間同士の親しき交わりだけが大切にされ、そこに絶対的な信頼を置くとき、人は目に見えて形あるもの、それらしく見える力あるものに重みを置くようになります。そして、それこそがそれらしく、絶対的なものとなり、そこから力のない者、できない人は排除され、人と人との間に隔てが生じてくるようになるのです。結局は、神の助けさえも必要とされなくなってしまうのです。詩人の恐れはここにあるのであり、そのため祈っているのです。

「人は友に向かって偽りを言い、滑らかな唇、二心をもって話します。主よ、すべて滅ぼしてください。滑らかな唇と威張って語る舌を。」(3-4 節)。

詩人は、神さまの裁きに状況を委ねています。

「滑らかな唇を滅ぼしてください」と。

詩人のこの祈りは、人の口を通して語られる言語がもっている力、つまり、真実な人たちが神さまにのみより頼んでいる敬虔さが無視され、破壊されてしまうほどの邪悪な言葉使い、それがどれだけ大きな

罪であるかを示しているのです。

本来、言語は天地創造の際に神さまに用いられたものです。神さまの言葉によって人間も他の被造物と同じように造られました。人間は造られた被造物です。被造物は言語を支配してはなりません。しかし、他の被造物と同じように造られた人間が、他の被造物と携帯して、それらを管理し、この世界がよりよく生かされるように導いていくことを命じられている人間が、被造物である立場から離れ、他の被造物との間で言語を支配し、言葉によって自分以外のものを支配していこうとすると、それは、神の領域を侵すことに他ならないのではないのでしょうか。

人間は造られた被造物であります。造られた者として生きることが被造物の義務ですから、人が造られた者として生きる義務からはなれ、滑らかな唇をもって威張って言葉を武器としていこうとすると、その人は言葉を支配し、周りを自分の支配下に置こうとしていることになるのでしょう。

「滑らかな唇と威張って語る舌を滅ぼしてください」。

国の政治家に付き添う問題は権力と金の問題でしょう。いつの時代においても

政治家に付きまとう二つの関係はかけ離すことのできない問題です。

ところが、教会はどうでしょうか。教会に国の政治家たちと同じ問題がないとはいえないでしょう。特に、中世の腐敗した教会はまさに権力とお金の問題が絡まっていました。神の僕として立たされている者が、神の言葉を武器として用いることを通して権力を作り上げていました。そして、その側近に立つ者たちが滑らかな言葉を持って神の僕をあやつり、神の僕が持っている力を利用して、力のない人たちに偽りの真理を押し付けていました。持っている人間同士の親しき交わり、豊かな人たちの交わりの中に、まことの神の姿、まことの神の真実はその跡を探すこともできないくらいの教会形成をしていたのです。人間的な親しき交わりこそが絶対的なものとされていく教会。その中では、神の言葉の敬虔さや神の言葉の助けなど、まったく必要とされなくなっていくます。

今の教会にはどうでしょうか。神の言葉を武器として利用し、その中から権力を作り上げようとする者、それと結託して代わりにその権力を行使しようとする人が、今の時代にはいないと言えるのでしょうか。教会は信徒のものでもなければ、そこで働く主の僕のものでもありません。主のもの

です。主のものを人間は管理し、その中でみことばの宣教の働きを担っていくことが許されているのみです。

いずれの時代にあっても同じことが繰り返されているように、腐敗していた中世の教会の中から立ち上がったルターの思いが深く浸されている賛美歌 141 番の歌詞をともに吟味してみましょう。

神よ、高きより かえりみたまえ、この世にのこれる 聖徒すくなく

人々はすべてみことばあなどり むなしく生きる

おのれの思いに たくらみうかび ころところは 乱れ離れて

むなしき力に たよれる世びとに みことば語る

乱れとうめきの われをかこめば 救いのことばを いまこそかたる。

心を傾け 恵みを受け入れ 力を受けよ

七たびきよめし 銀の言葉は 十字架に示さる み神のことば

ちからと光は 地のうえあまねく あらわれいでぬ

この歌の中で、ルターは、今日の詩編

の 7 節の後半で「土の炉で七たび練り清めた銀」と書いてあることを、「十字架に示されたみことば」と歌っています。「十字架に示されたみことば」とは、十字架の主の他にはいません。

このクリスマスにみことばとして来られる主は、他でもなく十字架の主なのです。教会の主人はこの方であり、この方の下に集まるわたしたちは、この方によって牧会されるべき罪人の群れであるのです。人間は言葉を支配してはなりません。滑らか唇を持って親しき人間的集まりをはかろうとして、それこそが教会形成に最もらしく見えてしまうことに多くの弱さを抱えているわたしたちであるけれども、そんなわたしたちがクリスマスの主を、教会の主を待ち望むことが許されているということ。幼子イエスさまを礼拝するためにベツレヘムへ招かれ、十字架の主の下へ集まることが、これだけ多くの弱さを抱えているわたしたちが許されているということ、この季節に大切にすることで過ごしていきたいです。自分の歩むべき足下を確かめて、みことばを支配する者ではなく、みことばによってこそ生かされる者でありたい、そう思います。

## 【礼拝予定】

### 【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10時30分～

|  |
|--|
| 12月3日(日) 待降節第1主日<br>聖書：エゼキエル33:14-16・2テサロニケ3:6-13・ルカ19:28-40<br>主題：十字架の主をお載せして 讃美歌1((教会)/78(教会)/94(教団))              |
| 12月10日(日) 待降節第2主日<br>聖書：マラキ3:1-3・フィリピ1:3-11・ルカ3:1-6<br>主題：荒野での叫び 讃美歌7(教会)/96(教団)/13(教会)/                             |
| 12月17日(日) 待降節第3主日<br>聖書：サムエル7:8-16・ローマ16:25-27・ルカ1:26-38<br>主題：お言葉通りになりますように 讃美歌：5(教会)95(教団)/4(教会)/                  |
| 12月24日(日) 待降節第4主日・主イエス・キリスト降誕祭<br>聖書：ミカ5:1-4・ヘブライ10:5-10・ルカ1:39-45<br>主題：平和をもたらす方 讃美歌25(教会)/70(子ども)/39(教会)/26(教会)    |
| 12月24日(日) クリスマスイヴ・キャンドルサーヴィス<br>聖書：ルカによる福音書2章1-20節 主題：さあ、ベツレヘムへ行こう<br>讃美歌：33(教会)/32(教会)/31(教会)/37(教会)/98(教団)/78(子ども) |

### 【水曜礼拝】 毎週水曜日 午後7時～

|  |
|--|
| 12月6日 第一水曜日<br>聖書：詩篇13編 主題：いつまで、主よ<br>讃美：227(教会)/1(教会)/262(教会)/4(教会)                                     |
| 12月13日(水) 第二水曜日<br>聖書：詩編14編 主題：善を行う人はいない、一人もいない<br>讃美：222(教会)/96(教団)/262(教会)/13(教会)                      |
| 12月20日(水) 第三水曜日<br>聖書：詩編15編 主題：神の天幕に宿る人<br>讃美：167(教会)/14(教会)/262(教会)/94(教団)                              |
| 12月27日(水) 第四水曜日(福音書記者・使徒ヨハネの日記念)<br>聖書：ヨハネ21章20-25節 主題：あなたはわたしに従いなさい<br>讃美：39(教会)/111(教団)/262(教会)/37(教会) |

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】 第三日曜日12時30分～ 聖書をやさしく学ぶ会は12月は休み。  
随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など  
どの集会もどなたでもご参加いただけます。お待ちしております。